

文化乙丑春上東

赤水長先生
長崎紀行

畫圖標註

全壹冊

標註

圖畫

長崎紀行

水戸赤水先生記

完

文化乙丑春上東

赤水長先生
長崎紀行

全壹冊

畫圖標註



題長崎行役日記首

紀行之史家之一體也。以居其實不
居美為要。否。必觀者何愁。蓋
其人眼界寬闊。冲襟浩穰。得一勝
狀。詳之。則一境界。賦一詩。得五振。則
一風月。其篇章傳之。足矣。奚必假

楮毫以強緣飾之乎。但恨近以簸
弄筆舌。記怪志異。多演呖語。稗
說眩曜於覽者耳目。使人忽冰粉
慴伏焉。豈敢謂之文辭不朽之手。
今閱此冊之所載。則往年常陸
之海舶。漂流西洋。乃及清國之疆。

也。府丞之所關。雖彼地其處治之復
容易也乎。急諭之朝。譯皆監查。既
了。遂照條例。支給錢米。養贍以俟。
為月之後。候風便津。裝護送瓊
浦矣。於是乃自水府遣官使迎之。踵
引而還。長玄珠者。在去使中。留滯雖

日淺。自相清宮。風習威儀。衣幘。主他
至。卓子卓。杌等瑣事。見閭所達。必丁
寧。國字譯通。不敢滲漏焉。且筑之太宰
府。勢之嚴島。近湖等地勢。陸立水浮
雖卒迫。一。昧主方位。遇會心處。賦詩
澄古歌。或自下注脚。正當踪跡之。焉再

遊之鑒焉。宜矣。長氏素負蚤譽之名。
深究天衍地輿之度。竟作圖也。縣象著
明。其功復出千古。予雖老矣。今日序
此集。謗子衆。以伊人學術業已有
醒於天下之眼焉。

文化二年乙丑夏四月穀旦

播州奥田元継題於浪

華林古書堂



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '天', '其', '大', '元', '継', '浪']

長崎行役日記

天明和二年乙酉十一月磯原村の廻船、船内小
 吹流より、安國の漂着者一、是來七月彼處あ
 使船より、長崎より送り来る、おれに因り、
 本藩乃吏出候へり、赴く、予ハ磯原此里シヤウヤふ
 代フナシヤヤに船正又市をもち、汽子ヲヒ裕介に僕より、
 郡令此下知ありて、九月廿八日、家を出て水府に
 いり、即吏小林半を伴、空田氏を請ふ、人小、
 い、後の九月廿日、水府を立、三日の八時、東
 郷磯川乃藩邸にけり、予ハ此を、去日何、大

黒屋長たまつに病む、四月八日過りて

五日寅に刻オメツケカタ監曹より、多羽理をとり坂部伊分

ちる人郎中乃中めはして行別を授け、門外を以

轡ウミ二つ鎗二つ換ふ二つ、多羽理の二駄、小荷駄二匹上

下廿一人あり、是日冬戸塚ふむ家公事、魔路監

早と成敷きくお入の息に筆をうづもあられハ

道よりし事、細ハ記一證ふてし

六日、友沢の越りちし、清浄老をとり、時家の

惣おちなり、信持を常に諸国とせし行せし

と云ふ、小栗判官乃事、いづくの説あると云

附會する多し、其実は知くしし○馬入川、舟渡し

ふ六甲智れ、猿橋を流るる、白旗村は明

神河の金子宮といふ、源延尉乃首を以てし

不、毎度の首塚と、祠の前ふあり

白旗明神

飛禽已盡、奈良寺、不滅、淮陰元帥功、昔日

更無麟閣賞、孤村空祭、白旗宮

大磯の驛、松木五、実ふん、くハ大磯の如く

乃く、此ハ虎澤、おれ旧蹟あり○時五、沢

を心づき、もれと云ふ、おれ、此に能人三と云

右ふ

松より、はるかに、あふるき

ゆきけふ、ふん、くハ大磯

乃く

あけ

く、あけ、あけ、あけ、あけ

時、くハ、秋の、あけ

三ノ風

晴まーはまの店をわき
ていふまゝのやいふや
をいふまゝ大いふや
のふまゝはひふまゝ
ふまゝはひふまゝは
ふまゝはひふまゝ

政本回原城

摘葉丹後守殿清善授所

宗長ふまゝふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

宗祇ふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

自讃

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

み

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

み

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

み

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

ふまゝはひふまゝはひふまゝ

函
嶺

何函谷關

清少納言
 上
 けしき
 けしき

光仁帝の時伊予國之嶋より
この地に移り住居五百石

日人沼村

文奇行是日已

古來子

はのこねる、うねのねくら

百八廿四
中東伝の日記
明軍監法
氏荀
編
事
有

明軍監汪承民荀執。以
上通。一。向事者

小島一ヶ所あり、かし、隔て今泉村、孝子傳に載
 一五里なり、乃ち終今に富者ありとて、錫山の
 峰をたゞし。○面土川、水澄し、日本一の早川也。
 岩淵とて、富者、此たよみ、みずしき、都て、海原
 之ヶ所あり、かれ川とて、一里、たけ乃川、早川
 上れ、演六、本松とて、清瑠璃女の墓あり、なり
 ○蒲原の油井。○蒲原あり、無海、清水、深、三保
 乃江とて、皆田子、海とて、強、桑なり、薩摩山地
 花あり、元来、海の岸とて、海、一里、明和、元、年、神宮
 本神、乃時、乃今、これ、道を、家とて、一里、昔、元、今、数

所なり、俗に親を以てするを興

津巨鰲山清見寺求玉院寺以二百名度我北

法と雪舟の草ならんを、又法見の寄れを

ふれちとあつと
はと道とちと
はと道とちと

得真、堂前二十七日乃遷梅之五重塔以美

なま 硯 イシハ の 跡 あり

題清見寺

壽躋清見寺、山海暮秋天、後宿芙蓉壑前。

浮田子船

江
瓦
工
易
記

2

27

27

2

おのつて四よ

おのつて四よ
おのつて四よ
おのつて四よ

おのつて四よ
おのつて四よ
おのつて四よ

おのつて四よ
おのつて四よ
おのつて四よ

人侵霧行

大堰川遠境の境なり、おろし、あけく越え五丁
後つて、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

過小夜中山

昔日遊京洛、吾廬在海東、豈料將白髮、復

越此山中

昔乃す人の中に、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ、おのつて四よ

加茂天師の医療より草を
ゆかりの鳥巢道人の歌男
なり見ると先ずより吉田
居り天師和合の御教を

鳳来山、昔理修仙人来
栖云

古歌

月夜にふりていづる月
はつとふりていづる月

七五律の、八信長記より

大樹寺の、八信長記より

古歌

長崎の、八信長記より

一田大庭門

古歌

月夜にふりていづる月
はつとふりていづる月

加茂天師の医療より草を
ゆかりの鳥巢道人の歌男

加茂天師の医療より草を
ゆかりの鳥巢道人の歌男

長崎新聞

山と三遠乃らふしとる○白浪笑○若田城
○伊奈村、おれのお場所、良香散るうほ茶を
あり、うほまは加茂天師の、風鈴の男こととる
とる、うほまは加茂天師の、風鈴の男こととる

題加藤山人藥肆

青松落々帶清風、地接鳳来仙路通、幾歲

主人能賣藥也、知市上有壺公、

○沙油○十一日、赤坂の宿、入宿、沙門寂照、

俗名大に定基、うほまは加茂天師の、風鈴の男こととる

世と、うほまは加茂天師の、風鈴の男こととる

おの祈ハ七松平の一長次家、れはななり、右は松平
乃御あり○實就るハ二村山、はなり

神祖、うほまは加茂天師の、風鈴の男こととる

百六、うほまは加茂天師の、風鈴の男こととる

と人の、うほまは加茂天師の、風鈴の男こととる

長と二百八、うほまは加茂天師の、風鈴の男こととる

事ハ右、うほまは加茂天師の、風鈴の男こととる

た、うほまは加茂天師の、風鈴の男こととる

橋、うほまは加茂天師の、風鈴の男こととる

乃池、うほまは加茂天師の、風鈴の男こととる

舟より此渡より北に流るるに西向く舟を今
 見し入行人を○和久鼻より十町又丁川の上
 端より五百羅漢ありとて詣ふ
 舟中自西風吹く舟は蓬を寒くく日と雲
 其五日快晴ありとて止候、舟はあつちあつち
 舟橋より西向く舟端より舟は蛭見三丈の時
 天に磐楠イハナ舟より桑々く流るる舟より舟とて和
 久の鼻より捷徑スリミチをわけし四十町半とて舟
 渡してつちあり、舟より八尾崎より川舟とて和
 久入と和久の鼻と着く

一谷覽古

知是源平古戰場須磨明石望花々旌旗

赤白今何在唯有青山映夕陽

敗盛墓

松風玉笛響旌幟白雲垂昔日飛花地後

人墮淚碑

一谷

長中行

壽永行宮接海濱東兵一炬忽灰塵只今

唯有長松樹日暮秋風愁殺人

山女之歌

何れも山女はさういふは
月帆は月をさういふは

家話

ついでにさういふは
さういふはさういふは

何れも山女はさういふは
月帆は月をさういふは

何れも山女はさういふは
月帆は月をさういふは

何れも山女はさういふは
月帆は月をさういふは

何れも山女はさういふは
月帆は月をさういふは

何れも山女はさういふは
月帆は月をさういふは

何れも山女はさういふは
月帆は月をさういふは

何れも山女はさういふは
月帆は月をさういふは

何れも山女はさういふは
月帆は月をさういふは

何れも山女はさういふは
月帆は月をさういふは

何れも山女はさういふは
月帆は月をさういふは

南にあたり八栗嶽ハ島山旁と帯く^{カスガ}
るも五六里もあれたし

八嶋覽言

壽永南巡日海山入戦圖英雄本不返千

歳暮雲孤

右ハ京上船場左に縄島と云ふ嶋^{シマ}に在
る島東に日暮く傳ふ乃日比^ヒは傳ふ
今^{イマ}三十一里横^{ヨコ}廣^{ヒロ}を渡^{ワタ}りし日^ヒハ風^{フウ}
すこし強^{ツヨク}なれハ舟^{フネ}も砕^砕ける人もあり

廿八日

廿九日^{ニナニチ}津^ツ留^{リウ}より陸^{リク}へ下^シれハ夜^ヨなう^ウすナ小^コ店^{テン}を
備^ビ前^{ゼン}院^{イン}の磁^セ窯^{コウ}ありき升^{シヨウ}に人^{ヒト}入^イの^ノは^ハは
ち^チ海^{カイ}なる^ナと下^シる^ルは^ハも遠^{トウ}路^ロ横^{ヨコ}へ^ヘ船^{フネ}ハ買^カ
人^{ヒト}如^ニし^シの地^チす^スて^テ見^ミる^ルは^ハ島^{シマ}戸^コを^ヲみ^ミる^ルを
や^ヤし^シ候^{コウ}ハ本^{ホン}島^{シマ}船^{フネ}は^ハ海^{カイ}と^ト年^{ネン}家^カれ^レ船^{フネ}も^モ
し^シ海^{カイ}の^ノ口^コより^{ヨリ}島^{シマ}戸^コを^ヲ海^{カイ}の^ノう^ウりて^テ島^{シマ}
の^ノ海^{カイ}と^トい^イつ^ツれ^レり^リと^ト南^{ナン}の^ノ山^{サン}を^ヲ横^{ヨコ}へ^ヘ島^{シマ}の^ノ海^{カイ}
城^{ヤシラ}園^{エン}夕^{セキ}日^{ニチ}映^{ウツ}る^ル林^{リン}梢^{ショウ}小^コ船^{フネ}ふ^フ海^{カイ}上^{カミ}の^ノ海^{カイ}
つ^ツと申^{マウ}れ^レ刻^{コク}より^{ヨリ}未^ミの^ノつ^ツせ^セハ帆^{ファン}を^ヲひ^ヒき^キ漕^{ソウ}ぎ^ギを
遠^{ハル}く^ク金^{キン}比^ヒ羅^ラの^ノ丸^{マル}龜^キ城^{シヨウ}を^ヲ望^{ノゾ}み^ミる^ルを

ほろろ白
なまこころなまこころ
手あし

これ下品なり、明石錦とて亭主とて高流なり
托乃端切とてとせざる、皆上品とて、地味を
唐山人とてたてし、とて、倭仙後、錦より過
るり、袴地とて、紋目位ハ至極のふゆ
よき、なまこころ、なまこころ、又役とて、
なまこころ、なまこころ、なまこころ、

題平家蟹

夢中在帝所二十四年、榮豈意介虫小猶

遺平氏名

八日未明、いづ、城の隙と通り、とて、平氏
けし、豊後、の城と、思、海、上、と、平、家、屋、の、名、を、

す、と、本、金、の、隙、と、屋、金、と、お、の、主、乃、備、後、貴

櫃、あり、漆、と、い、く、お、家、と、い、く、家、と、い、く、

ね、く、是、と、九、日、に、備、後、ハ、皆、貴、格、の、家、と、い、く、

石、灰、と、お、中、と、い、く、掘、鑿、と、い、く、焼、と、い、く、

用、と、い、く、掘、と、い、く、道、方、川、あり、若、屋、に、渡、

四、里、と、通、用、と、い、く、お、小、更、多、く、有、さ、う、

い、と、更、多、く、い、く、や、と、い、く、平、氏、と、い、く、

と、い、く、更、多、く、い、く、

能、方、村、と、い、く、更、多、く、い、く、

双、林、院、と、い、く、福、恩、侯、乃、是、院、と、い、く、

家之乃無恙と云ふ飯塚に宿る

一日雨ふる冷水峠を越ゆ風ふり人馬は

苦む山家驛より録し又人おけり幸附

一里ふた本松を越ゆ小門より傍より右

の方に麓無き八法満山立飲みし電山院

前より一の高山なるも松院ハ天狗より通新

る所山中より行くと松島に寺院あり坊

松より一里餘松海の中云ふ松より二里半

寺方より寺下より天満宮乃境内なる松

より松さびより石鳥居石橋二王門別殿あり

乃法堂あり又寺云浮殿中門回廊本松

樂堂鐘樓あり後日松島の東松あり本

松乃松あり形梅あり松に松あり松あり

あり法録ありより寺より松より松あり

形梅あり松あり松あり松あり松あり

字に松あり松あり松あり松あり松あり

松あり松あり松あり松あり松あり

松あり松あり松あり松あり松あり

松あり松あり松あり松あり松あり

松あり松あり松あり松あり松あり

法満山

古きよ

法満山は松あり松あり松あり

松あり

松あり松あり松あり松あり松あり

松あり

松あり松あり松あり松あり松あり

松あり

松あり松あり松あり松あり松あり

松あり

松あり松あり松あり松あり松あり

松あり

松あり松あり松あり松あり松あり

明隆天錫天満宮詩 無常
說法現神通千里飛梅一夜
松萬事夢醒雲吐月觀音寺
裡一聲鐘

明洪序詩 日本曾聞北野
君慶梅滿洒又能安謫居西
府三十里一夜飛香渡海雲

延喜三年二月二十五日右大臣
亮子配所葬于安樂寺

年為東仲文建立、今れ東原、さへ昔の諸君に
 之代、延壽王後と号し、神宮を移さるゝ、
 東原を二月とせしむる、昔ハ、
 梅の字ハ、女の枝ハ、經文を平う、
 新なる、ゆゑ、人々を尊信、
 多ふ、あまの御尊、
 外と對し、あまの御尊、
 神宮を移さるゝ、
 乃、連歌なり、

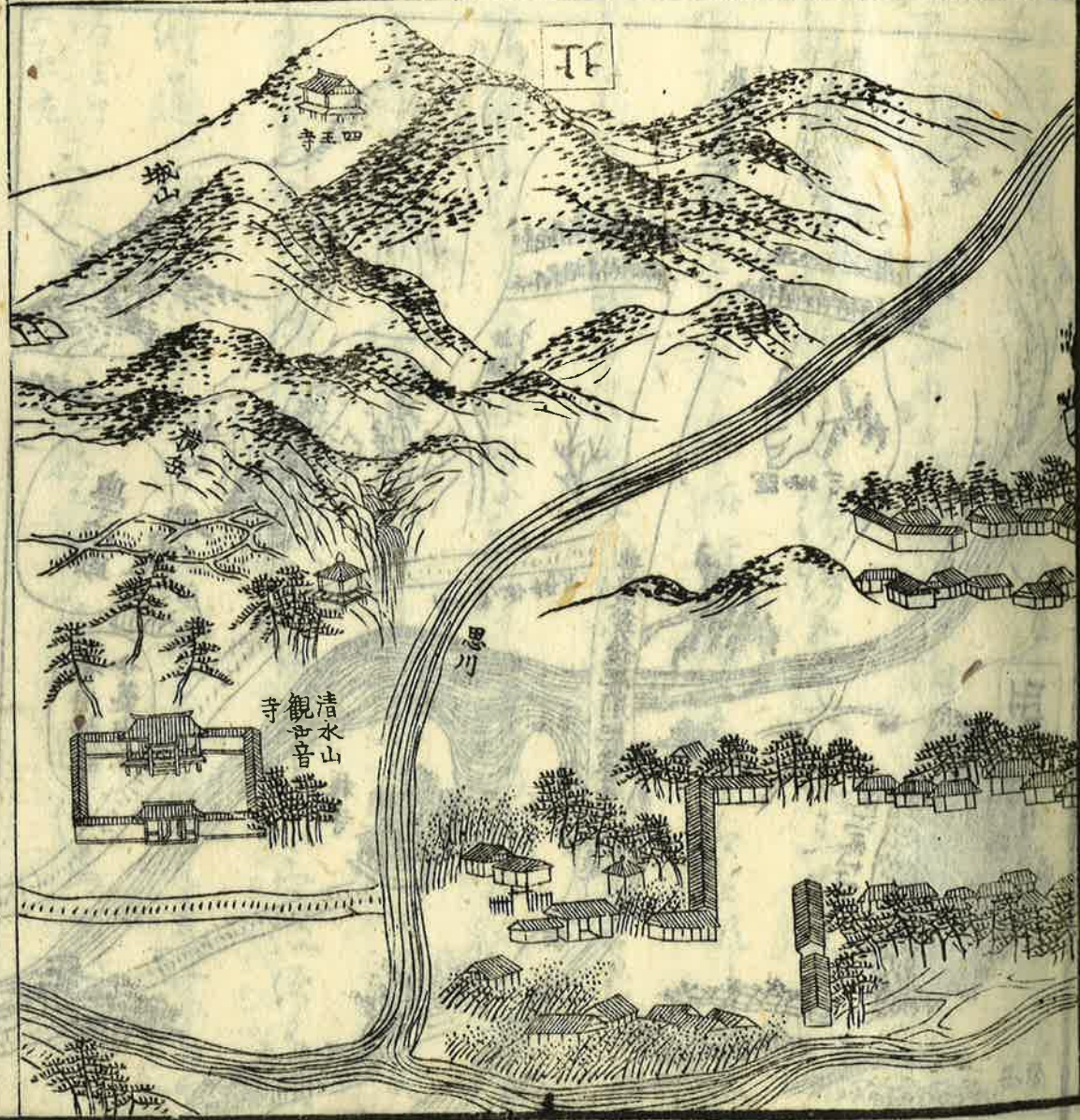
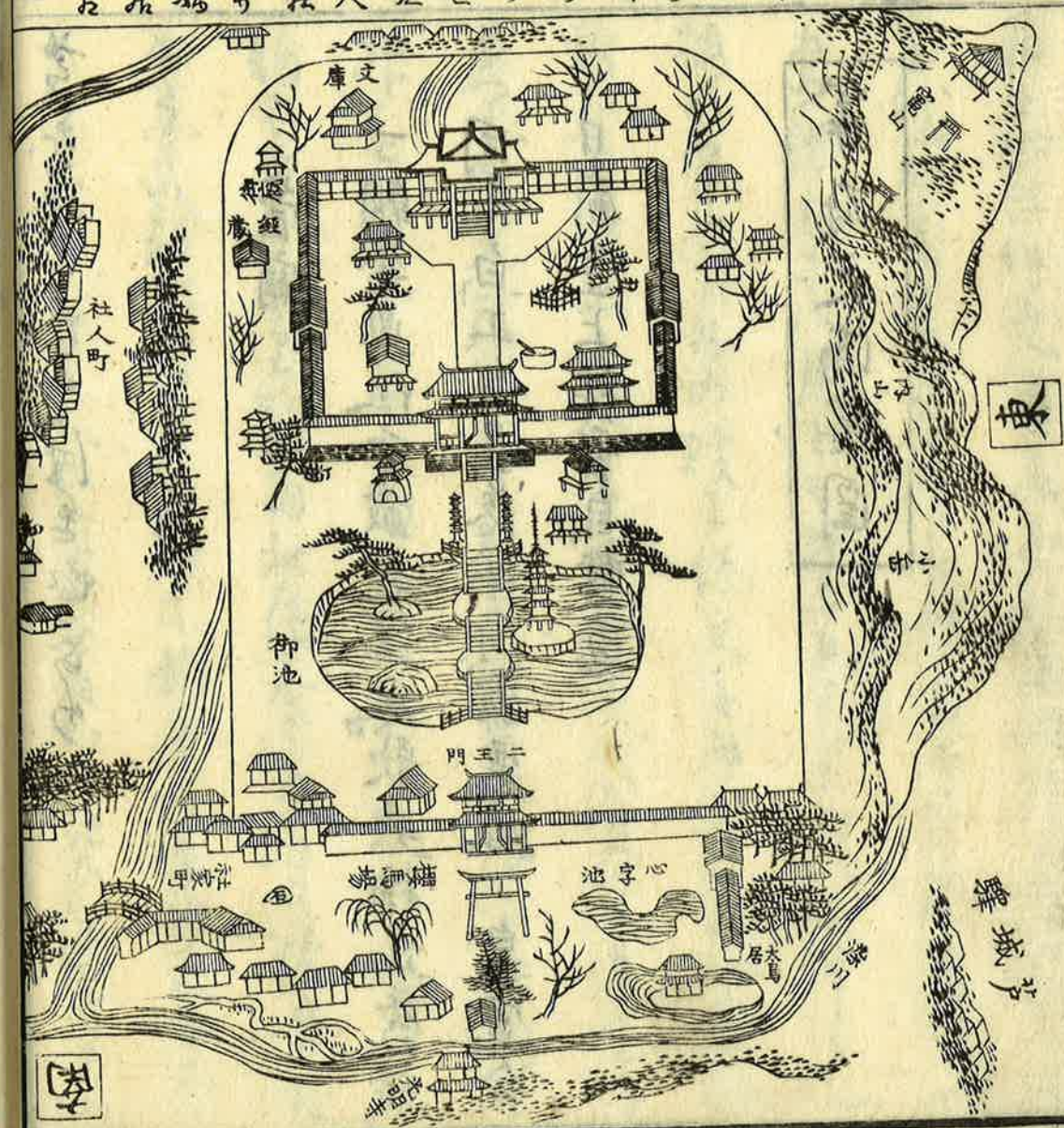
乃、連歌なり、

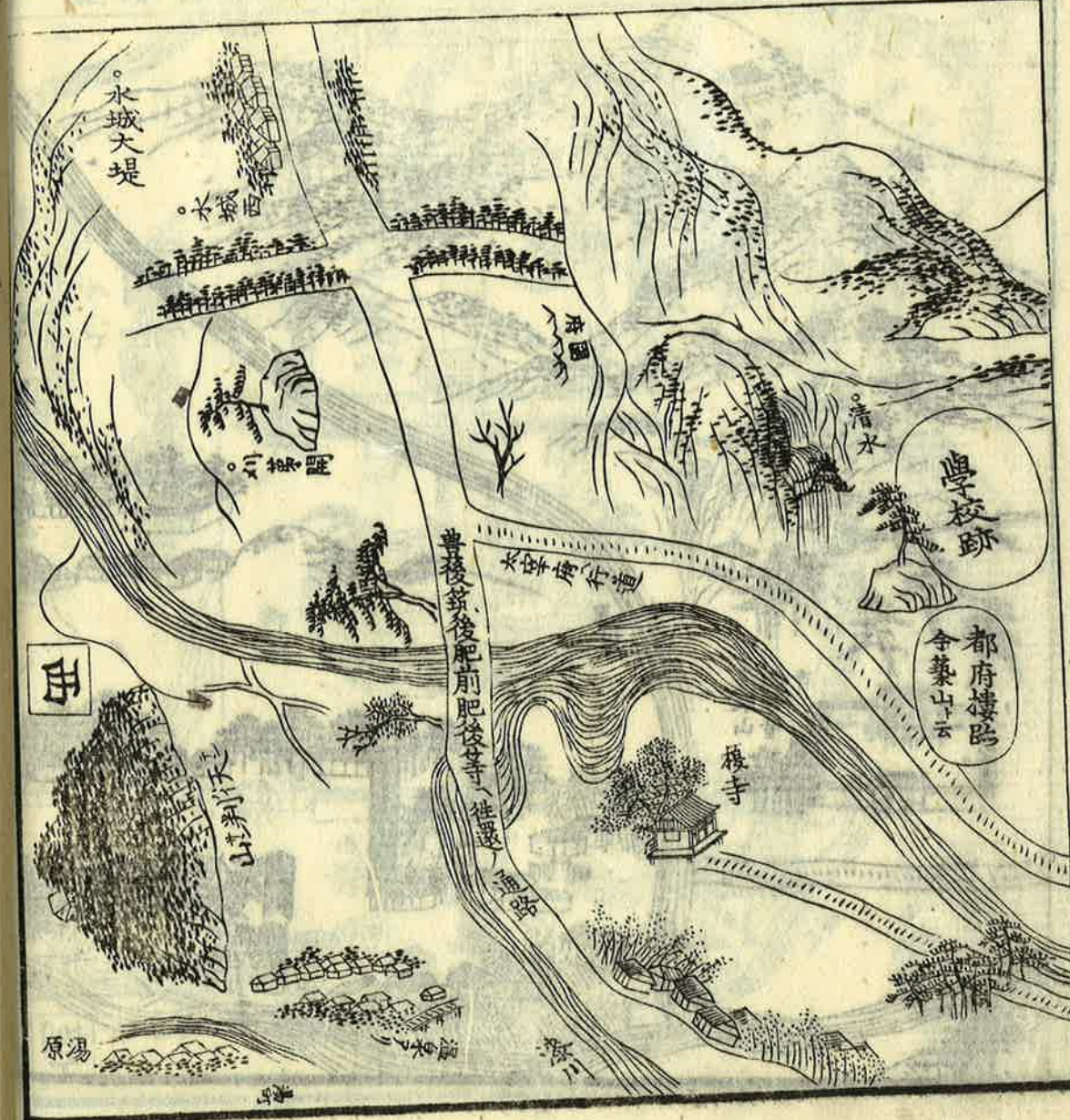
菅廟

一朝登鼎位、千載起儒風、歌與柿山秀、詩
 同元白、工台星落、宰府、霹靂感、
 日廟堂上、瑞雲自、鬱葱、
 皇宮、今

宰府天満宮圖

白雲の山にありては
 外殿と云ふは味酒の要
 行といふ人よりなり一説曰
 な原仲子と云ふと飯沼は
 此屋社地と定むと處より
 必腹心なれといふの事なり
 又此處より南をさへりて
 一里は城門の定む所なり
 其の跡は官家名所といふ人
 物と云ひける一説は此社
 城といふをいふなりといふ
 後醍醐天皇の御時より
 不承信丹と云ふとより大なる
 小なりなる此處よりいふ
 是れ今にいつるなり





此頃より舟中より石城後の水田小を福屋渡り
 上給地三子石室前より清水と合はば千石と
 敷法親王に属しと傳へた六段三丈目ハ祿
 五段五丈目と大なる信敬と云ふ石と取らる
 上と石原氏より妻帯なりしもの大なる石と
 清僧小なり弟子京都より来り嗣今此に取
 る近きつ乃二男なりと、次は小島居たりと
 あり妻帯と、後段勾當、新成流とて二段傳へて
 修造一切れを勢成とて、皆妻帯なりと妻帯なり
 名とす、二大丈目ハ小島居たり、同但馬守、同加賀

言ふ

川を右にふりてわ
せし後ともいふものなり

川上小山阿波萩のあたりに山ありて
其日ハ雲より雪すくすくして風を
し、牛車

十日の夜は信の山より山頂子ありて

昼飯より温泉より山頂より多く松樹、茶梅、さくら

人々を皆心をあけり、実と地とをいふ、いふと

小橋より、姓屋よりなる温泉あり

十一日の夜は萩の十国合の捕を、道中一

人あり、園より温泉す、さくら、さくら、さくら

里、舟を渡る、帆をさくら、さくら、さくら

さくら、さくら、さくら、さくら、さくら、さくら

乃道門より、さくら、さくら、さくら、さくら

長き一里、さくら、さくら、さくら、さくら

さくら、さくら、さくら、さくら、さくら、さくら

さくら、さくら、さくら、さくら、さくら、さくら

さくら、さくら、さくら、さくら、さくら、さくら

さくら、さくら、さくら、さくら、さくら、さくら

さくら、さくら、さくら、さくら、さくら、さくら

さくら、さくら、さくら、さくら、さくら、さくら

十二日、さくら、さくら、さくら、さくら、さくら

一作彼村

筆とタントストウコト云
鳥の時乃草
至平に毛様未詳知
著語者清補記之
華音ハモテウト云

筆者リウトルフロイトン像



○升降園よりみまふり

の木のすゝめをきく
破工の音をきく内は金
ねの音をきく内は金
すゝめにけりてへ自
るるの音をきく内は金
すゝめをきく

又節量具と云

タルモメートルと云

長と凡寸表作しと云

金と云

まじりし筆を量る時身なりとて
筒の中に入りしを板にききて
板に文字ありしをききて
筆に筆人はけりて
のりて板にききて
ききて遠く見ゆ
美麗なりとて
筆に筆人はけりて
大鏡を新しにけりて
座中此人をけりて

1. The first part of the book is a
 preface by the author, in which
 he explains the purpose of the
 work and the scope of the
 investigation.

以下又花園乃よれる様ふきふくしめぬの申
 央ふなるやうに定むれば横に尺長きとて
 けりといひ難いといはれり又四方乃隅より宛て通
 事人よりとておも人の丸とみし賭勝負をす
 ちうとてとて厨下よりとてとてとてとてとて
 屠者^{トハキ}の^{ナニガ}とてとてとてとてとてとてとてとてとて
 キリコロス
 ちうとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 双とてとてとてとてとてとてとてとてとて
 十とてとてとてとてとてとてとてとてとて
 了とてとてとてとてとてとてとてとてとて

鬼奴 ^{クロシボウ}



鬼命如くしりふ事れん
 鼻低
 けふふくしりふ事れん
 といふ衣のほれぬを更紗
 といふもいふ事あり
 キ

按本草綱目云廣南有穆牛即泉下牛形最小示雅謂之雅大會編謂之純牛

厨下此^{カイトコロ}外^{ワキ}迄^{ケモノヤ}迄^{ケモノヤ}ありて畜^{ケモノヤ}園を^{ケモノヤ}見^{ケモノヤ}れハ^{ケモノヤ}家^{ケモノヤ}又^{ケモノヤ}足^{ケモノヤ}
 牛^{カヒ}ナセハ^{カヒ}か^{カヒ}い^{カヒ}り^{カヒ}る^{カヒ}牛^{カヒ}ハ^{カヒ}は^{カヒ}方^{カヒ}の^{カヒ}牛^{カヒ}も^{カヒ}も^{カヒ}小^{カヒ}とし^{カヒ}
 角^{カヒ}短^{カヒ}く^{カヒ}身^{カヒ}大^{カヒ}く^{カヒ}形^{カヒ}と^{カヒ}す^{カヒ}に^{カヒ}等^{カヒ}し^{カヒ}時^{カヒ}珍^{カヒ}の^{カヒ}前^{カヒ}渭^{カヒ}穆^{カヒ}牛^{カヒ}
 乃^{カヒ}し^{カヒ}ば^{カヒ}此^{カヒ}牛^{カヒ}も^{カヒ}も^{カヒ}大^{カヒ}な^{カヒ}る^{カヒ}も^{カヒ}も^{カヒ}し^{カヒ}ら^{カヒ}う^{カヒ}も^{カヒ}も^{カヒ}と^{カヒ}人^{カヒ}
 道^{カヒ}に^{カヒ}向^{カヒ}て^{カヒ}一^{カヒ}放^{カヒ}し^{カヒ}牧^{カヒ}を^{カヒ}と^{カヒ}い^{カヒ}ふ^{カヒ}
 此^{カヒ}人^{カヒ}乃^{カヒ}姓^{カヒ}名^{カヒ}も^{カヒ}も^{カヒ}事^{カヒ}人^{カヒ}の^{カヒ}語^{カヒ}を^{カヒ}記^{カヒ}と^{カヒ}舩^{カヒ}頭^{カヒ}を^{カヒ}
 カ^{カヒ}ヒ^{カヒ}タ^{カヒ}ン^{カヒ}と^{カヒ}云^{カヒ}等^{カヒ}省^{カヒ}を^{カヒ}と^{カヒ}モ^{カヒ}トリ^{カヒ}日^{カヒ}雇^{カヒ}既^{カヒ}と^{カヒ}テ^{カヒ}ン^{カヒ}シ^{カヒ}ヤ^{カヒ}折^{カヒ}
 理^{カヒ}既^{カヒ}と^{カヒ}コ^{カヒ}ン^{カヒ}ヤ^{カヒ}料理^{カヒ}人^{カヒ}と^{カヒ}ク^{カヒ}ロ^{カヒ}ス^{カヒ}日^{カヒ}雇^{カヒ}と^{カヒ}タ^{カヒ}ロ^{カヒ}ス^{カヒ}と^{カヒ}云^{カヒ}
 一^{カヒ}カ^{カヒ}ビ^{カヒ}タ^{カヒ}ン^{カヒ}名^{カヒ}を^{カヒ}ヤ^{カヒ}ン^{カヒ}ガ^{カヒ}ラ^{カヒ}ス^{カヒ}年^{カヒ}ニ^{カヒ}ナ^{カヒ}四^{カヒ}
 一^{カヒ}同^{カヒ}ヘ^{カヒ}トリ^{カヒ}名^{カヒ}ハ^{カヒ}ア^{カヒ}テ^{カヒ}レ^{カヒ}ヤ^{カヒ}ア^{カヒ}ハ^{カヒ}ス^{カヒ}ト^{カヒ}ウ^{カヒ}チ^{カヒ}アル^{カヒ}年^{カヒ}ニ^{カヒ}拾^{カヒ}

一^{カヒ}己^{カヒ}年^{カヒ}より^{カヒ}在^{カヒ}留^{カヒ}乃^{カヒ}筆^{カヒ}省^{カヒ}名^{カヒ}ハ^{カヒ}ヒ^{カヒ}イ^{カヒ}トル^{カヒ}コ^{カヒ}ス^{カヒ}トル^{カヒ}年^{カヒ}四^{カヒ}ナ^{カヒ}二^{カヒ}
 一^{カヒ}為^{カヒ}年^{カヒ}迄^{カヒ}も^{カヒ}名^{カヒ}者^{カヒ}名^{カヒ}ハ^{カヒ}リ^{カヒ}ユ^{カヒ}ウ^{カヒ}トル^{カヒ}フ^{カヒ}ロ^{カヒ}イ^{カヒ}ト^{カヒ}シ^{カヒ}の^{カヒ}ニ^{カヒ}ナ^{カヒ}セ^{カヒ}
 一^{カヒ}同^{カヒ}ヘ^{カヒ}ス^{カヒ}レ^{カヒ}キ^{カヒ}コ^{カヒ}ユ^{カヒ}ル^{カヒ}コ^{カヒ}ツ^{カヒ}フ^{カヒ}年^{カヒ}ニ^{カヒ}ナ^{カヒ}セ^{カヒ}
 一^{カヒ}同^{カヒ}ヘ^{カヒ}ン^{カヒ}テ^{カヒ}ン^{カヒ}キ^{カヒ}ケ^{カヒ}エ^{カヒ}ル^{カヒ}キ^{カヒ}ハ^{カヒ}ニ^{カヒ}ナ^{カヒ}九^{カヒ}
 一^{カヒ}同^{カヒ}ヘ^{カヒ}イ^{カヒ}トル^{カヒ}ヘ^{カヒ}イ^{カヒ}ス^{カヒ}トル^{カヒ}ヘ^{カヒ}イ^{カヒ}ト^{カヒ}ハ^{カヒ}ニ^{カヒ}ナ^{カヒ}四^{カヒ}
 一^{カヒ}同^{カヒ}ヘ^{カヒ}ン^{カヒ}ケ^{カヒ}ル^{カヒ}ヘ^{カヒ}ル^{カヒ}ト^{カヒ}ス^{カヒ}タ^{カヒ}カ^{カヒ}ハ^{カヒ}ニ^{カヒ}ナ^{カヒ}四^{カヒ}
 一^{カヒ}七^{カヒ}多^{カヒ}在^{カヒ}留^{カヒ}此^{カヒ}上^{カヒ}外^{カヒ}療^{カヒ}ヒ^{カヒ}リ^{カヒ}ツ^{カヒ}フ^{カヒ}リ^{カヒ}ウ^{カヒ}ナ^{カヒ}アル^{カヒ}ト^{カヒ}ハ^{カヒ}ニ^{カヒ}ナ^{カヒ}セ^{カヒ}
 一^{カヒ}一^{カヒ}多^{カヒ}の^{カヒ}海^{カヒ}乃^{カヒ}外^{カヒ}療^{カヒ}ヤ^{カヒ}ン^{カヒ}フ^{カヒ}ラ^{カヒ}ン^{カヒ}ス^{カヒ}テ^{カヒ}ホ^{カヒ}ウ^{カヒ}ト^{カヒ}ハ^{カヒ}ニ^{カヒ}ナ^{カヒ}セ^{カヒ}
 一^{カヒ}一^{カヒ}多^{カヒ}の^{カヒ}上^{カヒ}留^{カヒ}の^{カヒ}花^{カヒ}池^{カヒ}と^{カヒ}ヘ^{カヒ}ル^{カヒ}メ^{カヒ}ヤ^{カヒ}ン^{カヒ}ス^{カヒ}ワ^{カヒ}ル^{カヒ}ラ^{カヒ}ヘ^{カヒ}ン^{カヒ}ハ^{カヒ}四^{カヒ}ナ^{カヒ}セ^{カヒ}
 一^{カヒ}一^{カヒ}同^{カヒ}年^{カヒ}を^{カヒ}在^{カヒ}留^{カヒ}の^{カヒ}大^{カヒ}ユ^{カヒ}ウ^{カヒ}ン^{カヒ}ケ^{カヒ}レ^{カヒ}ス^{カヒ}テ^{カヒ}ヤ^{カヒ}ン^{カヒ}シ^{カヒ}キ^{カヒ}年^{カヒ}ニ^{カヒ}ナ^{カヒ}三^{カヒ}

一云年より在留乃難物原カスフルハンシキ 年二十五
 一尚其新れ没 ヤンフレイテキウスル ニナ四
 外より其家奴二十四人合くるニナ七人
 阿茶地船とせ自來く九月廿日一歸ふ二艘乃其
 紐百人より一もふらつたを如何にせし定例を
 カ比丹、同止留ふ、こゝ人長崎役人より人、其通事
 を人といひて上下十人解ふ月十二日長崎にきて傳
 馬より、江戸へ参り、三月廿日浦戸へ参り
 ○長崎入津乃けり、此ハ寛永十三年の事なり、此等
 長崎百十八間、横丁十八間半、合敷二十五間、紅毛と

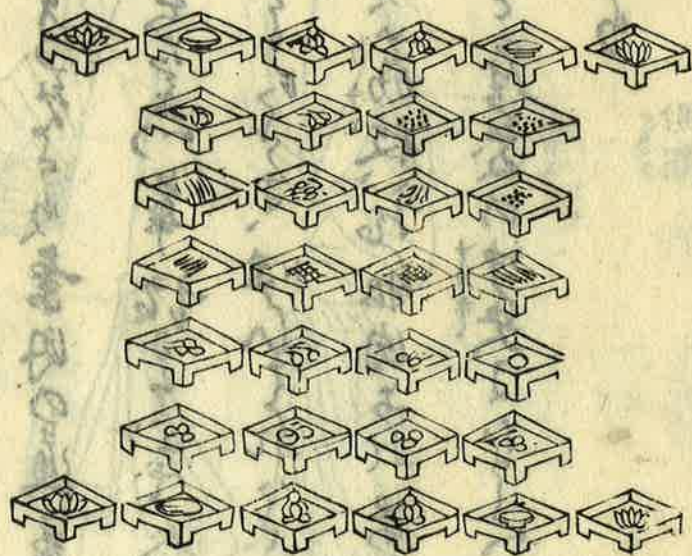
いふ、一より死にありても自色くてもはめ一切佛事
 たり、この出清町を寛永十三年に築く
 南蛮人を招き、その年の事を南蛮入津
 停上より、今ハ紅毛の館と成り、此地に浪病
 賃銀合ふ十六貫四百目、碇一ツ役浪を舟で、金ふ
 して、西より紅毛人より、まゝ、まゝといふ

紅毛館

王制從來柔遠民、紅毛委質在瓊津、五風
 十雨西洋外、勿道東方無聖人、
 多れより十禪寺に唐人館へ、仍大門へ入る

ちやうどさうして面歌中門をさへておれと被し
 びより耐下乃口の後より潜りよのめり候ふに
 唐人より来たてりてち候しと答へず、坐す人
 毛種とて一まつてより案内の通事人高尾
 左衛門のふとさへて華語にて唐人の
 言ふを流しとて、はいとれと漢語あり
 陽気かステス、荔枝、花、肉、れ、果、子、と、其、の、盛、
 へ、と、し、候、と、唐、室、の、中、央、よ、な、く、は、く、彼、の、
 風、と、さ、う、さ、う、り

其の中より人形のとらひのりものなど
 又大根乃はうりむなり
 唐人とされ給はりて我よりて買ひに渡り



のうちより人形のとらひのりものなど
 又大根乃はうりむなり
 唐人とされ給はりて我よりて買ひに渡り
 其の中より人形のとらひのりものなど
 又大根乃はうりむなり
 唐人とされ給はりて我よりて買ひに渡り
 其の中より人形のとらひのりものなど
 又大根乃はうりむなり
 唐人とされ給はりて我よりて買ひに渡り

舟人館中より滞りてゐる

清客館

聞説單干稱帝王年々嵐嶽至崎陽當時

文物何須問可歎衣冠非漢唐

舟より海を渡る船をいふ、一船は水の中央

ふわり、一船は岸に接する、船は乃ち

船長より下五箇、横五間、帆柱より又五間、四圍

船に上り、舟の底を西より、船は又東に二、三

重なる上、舟と人と云ふ、舟は又、舟は又

舟は又、舟は又、舟は又、舟は又、舟は又

福船船體の方より
斜にみる

舟は又、舟は又、舟は又、舟は又、舟は又

南京、福船は舟、舟は又、舟は又、舟は又

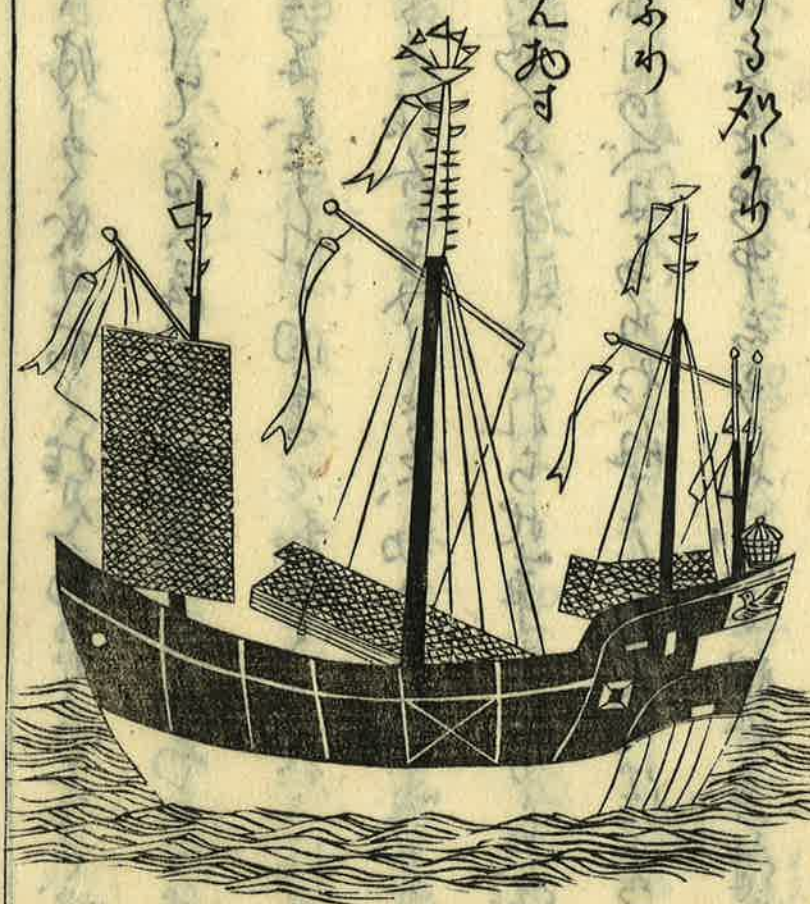
舟は又、舟は又、舟は又、舟は又、舟は又

舟は又、舟は又、舟は又、舟は又、舟は又

舟は又、舟は又、舟は又、舟は又、舟は又

舟は又、舟は又、舟は又、舟は又、舟は又

舟は又、舟は又、舟は又、舟は又、舟は又



臨園池果乎と梧と柳と

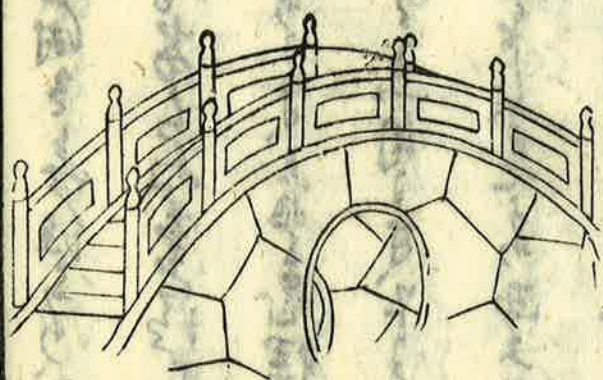
オトロリヤウス

[illegible]

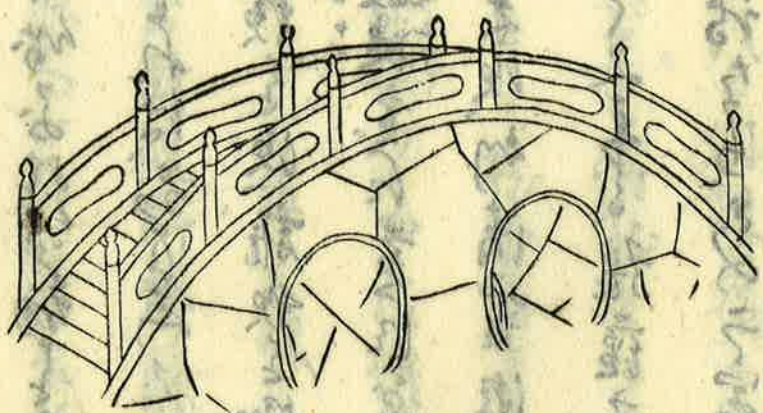
文綺子吳昌

唐今改所と題橋を、此ハ唐船より買上乃書經
 久れより所々吟詠し公儀涉用れ分ハ擇取、所々
 之清合乃れを入れとて受うりてふたるとい
 書物藏と見し文庫すあり、誦詠明神たれと云
 乃石垣高大方、ありと書經ハ石自由の處に
 石橋を造く大鼓橋
 同儀橋有

大鼓橋



眼鏡橋



石垣高大方、ありと書經ハ石自由の處に
 石橋を造く大鼓橋
 同儀橋有

成林島西川氏の家ありて
りふふ七人の国とて其家
とて凡て八百とて其家
ともふおとてすふ其家
ふし和たりて其家
ふし其家とて七人合たり
利ふたりて其家
事とて國人乗船ありて
ふし其家とて其家

めして阿蘇院乃本國へ長崎より船一
千里たりて其家より八戌の方よりありて其家
ふし其國とて其家平波雨とて國人の面
白くして其家乃其家し其家より其家ありて
世界を巡行して其家より其家ありて其家
けし其家國とて其家より其家ありて其家
属國とて其家より其家ありて其家ありて其家
其家ありて其家より其家ありて其家ありて其家
百里ありて其家より其家ありて其家ありて其家
ふし其家ありて其家より其家ありて其家ありて其家

いふ代官とて其家より其家ありて其家ありて其家

その咬啗也より其家より其家ありて其家ありて其家

く其家ありて其家より其家ありて其家ありて其家

はし其家ありて其家より其家ありて其家ありて其家

いふ其家ありて其家より其家ありて其家ありて其家

其家の長とて其家より其家ありて其家ありて其家

帆柱長とて其家より其家ありて其家ありて其家

其家より其家ありて其家ありて其家ありて其家

其家の長とて其家より其家ありて其家ありて其家

其家の長とて其家より其家ありて其家ありて其家

長崎 石火文のしるし
 ちん 總 軍國好
 法人
 石火文今ハ公司外
 ちん

[illegible]

江をよみて帰城す、佐々乃家老八海城地
 黒田氏、福島の地を^{イハハヤ}諒り、此城を鍋島
 氏に、地方にても用心よめ、是、七ヶ坂の所、大矢
 巻、船中大津戸とある、八石^{カキ}堀の高さ八尺、上
 二銃二挺あり、行く、同徑之、所、^{サレワタシ}石銅作、漆を
 横より、^{サレワタシ}形、角、此穴の徑、少一尺、又、い、火
 礮、一、半、入、此、家、法、を、し、又、城、実、入、金、石、丸、八、石
 石、を、小、豆、八、斗、此、^{カビテウ}市、を、と、い、ふ、^{コロハ}櫓、艇、を、し、指、
 する、け、る、大、矢、を、と、ある、時、ハ、之、を、書、め、て、長、崎、中、吏
 鍋、釜、も、持、け、人、死、を、と、い、ふ、^{イハハヤ}國、崩、も、云、果、必、人

錫 漆物座 漆唐紙 花白紙 飯唐紙

造紙 線香 根芥子 漆唐紙 漆唐紙 漆唐紙 妙和

安 睦足袋 玉細工 志筵 造冊紙

外 療道具一式 唐船細工 鐵

石 鴨石 唐様 鬚紙 綿子 煙草

南瓜 西瓜 八升豆 隠元豆 じやぶ

密料 大五倍 赤サテ 琉球芋 唐菓子

類 香紙 香紙 烟麻解 沙糖 白思水

烏羅保衣 香沙糖 火繩銀 小豆

糖 牛皮 質良饅頭

○南蛮菓子

ハルテケシヤアト カステラボウル 花ボウル

コシヘイト アルヘルカルメル ヲヘリヤス ハア

ハアスリヒレウス ヲアドウス タニコソウメン

ヒスカウト ハン 衣の外 ぬき 茶 走 下 袴

長崎

瓊海通夷夏百年佳氣開 客重譯語至 船

載貨財来 土俗皆華麗 士人多俊才 可憐

山水美 採筆暫徘徊

十七日寅刻 長崎 五里 人 山 崎 山 崎 山 崎

うゝあはれき、坂も急峻馬にのりて登し、
三里を走らば矢立驛ありて見送られたる麻
祉軒とてきつを酒を飲めりて帰る、横所れ
役人共も尾をなす、親子とてきつを飲めりて
大村より、坂も急峻、大お候二方より石付、是
地所は、里人此あゝきつを飲めりて海船より
とてとよみ観しとて、漁夫ハ義たきとて、漁夫
格もて、之を許さず、船中より、船中より、皆
来りて、うゝあはれき、坂も急峻、大お候二方より
石付、是地所は、里人此あゝきつを飲めりて海船より
とてとよみ観しとて、漁夫ハ義たきとて、漁夫

うゝあはれき、坂も急峻、大お候二方より
石付、是地所は、里人此あゝきつを飲めりて海船より
とてとよみ観しとて、漁夫ハ義たきとて、漁夫
格もて、之を許さず、船中より、船中より、皆
来りて、うゝあはれき、坂も急峻、大お候二方より
石付、是地所は、里人此あゝきつを飲めりて海船より
とてとよみ観しとて、漁夫ハ義たきとて、漁夫

十八日 塩原宿、温泉あり

十九日 神奈川

廿一日 本屋乃原

廿三日 小倉より、坂も急峻、大お候二方より
石付、是地所は、里人此あゝきつを飲めりて海船より
とてとよみ観しとて、漁夫ハ義たきとて、漁夫

ちくくおと、町家も娘、うけ持の居、つた
 ちかまり、丁丁ふおれ山、廣基山、福徳寺
 とてふされ善提所と、給地三百石、唐徳
 非乃安泰分、けふと遷仁とふ、と像を
 じつせしや、法と善と、^{ジヤウ}法と善と、
 小笠原の先祖墓、乃額ハ安國元長局、此
 等も、碑銘、漢、うき、外長、うき、
 乃、安國元長局、うき、石垣、石垣、安國元長局
 と、法漢の墓あり、安國元長局、乃後、安國元長局
 乃像を安國元長局、安國元長局の安國元長局

ちくくおと、町家も娘、うけ持の居、つた
 ちかまり、丁丁ふおれ山、廣基山、福徳寺
 とてふされ善提所と、給地三百石、唐徳
 非乃安泰分、けふと遷仁とふ、と像を
 じつせしや、法と善と、^{ジヤウ}法と善と、
 小笠原の先祖墓、乃額ハ安國元長局、此
 等も、碑銘、漢、うき、外長、うき、
 乃、安國元長局、うき、石垣、石垣、安國元長局
 と、法漢の墓あり、安國元長局、乃後、安國元長局
 乃像を安國元長局、安國元長局の安國元長局

十枚をかり、堆朱のすゝと朱又唐篆墨を載て
是を詩をゆれらるゝ予りやより書に披し
やむゝとえにそのまゝの詩ハも乃詩二巻を唐
帝みちて書をも書く、すゝに也ぬゝ乃て詩ハ
よ書流しれを紙又紙中の食用とて奥なる一巻
館一巻とあられや、その巻とて小倉乃紙物とて
しき男やとるなり、女四日や五日とて一日とて
清田より日暮り清田より長濱よりはくくも紙や
とめ丑の刻に下れ関とてく
廿七日遂にふゝとてふし陸よりやうづ龜山へ復

へ来備をて、洞壺海峯に遊ぐみたり、るゝ風を
あり、是より後よりとて三河所ふれ方に何れ泡
ちと、ち僧ちて東門より、安徳寺に陵のふゝ、
有る寺に本像とて安徳寺にたの陵より二伍尼
は侍乃い平家一族を像とて画く古法眼元佐乃
筆、次の唐唐の面の紙紙金張附あり、代法
寺を義合殿に始終とて最なる、古法を信の寺に
後れ山岸より檀乃浦へ水かへり、石塔あり、予
悉くそとく一付とて作る

謁

是避秦人

其二

仙女顏如玉、合歡盃幾傾、可憐琴與瑟、猶有鳳凰聲、

其三

美人長袖動、並立玉欄干、為舞霓裳曲、忽疑到廣寒、

其四

銀燭瓊筵上、青精與玉漿、樂哉仙窟趣、亦自似劉郎、

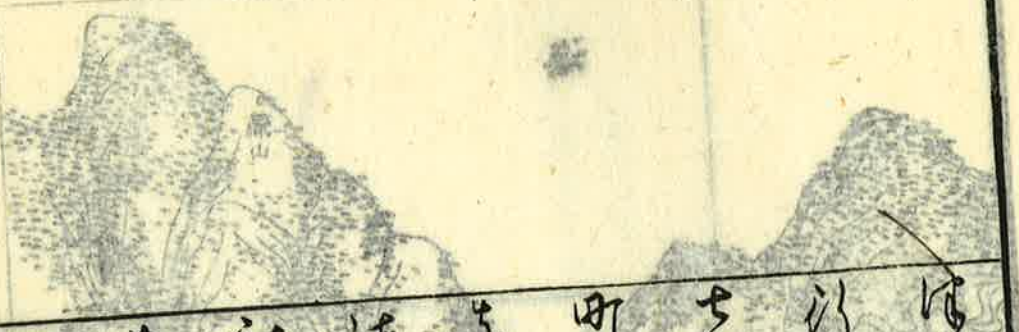
其五

燈背金屏暗、香熏錦褥開、陽臺雲雨夢、忽向枕頭來、

里人乃相、
不順、
て、
乃、
東、
冥、
知

あすに
いづれかへりてはるかに
あそびしをいふなり

はるより日ぬ八日通るなりとて海客入るなり
安南記二巻并親流海上番より作る
十一月四日ふつはし船とてあつてはるかに
うきく周防北室横とたふて上の英人成り
あつてはるかにあつてあり
又日つてはるかに通るなり海五里あつて大島なり
とてにふれなりとてあつての所なり方ハ若國を海
岸横に道通るなりとて見へり
六日風あつてはるかにあつてはるかに海と陸とを
平瀬とて大島なりとてあつてはるかに海と陸とを



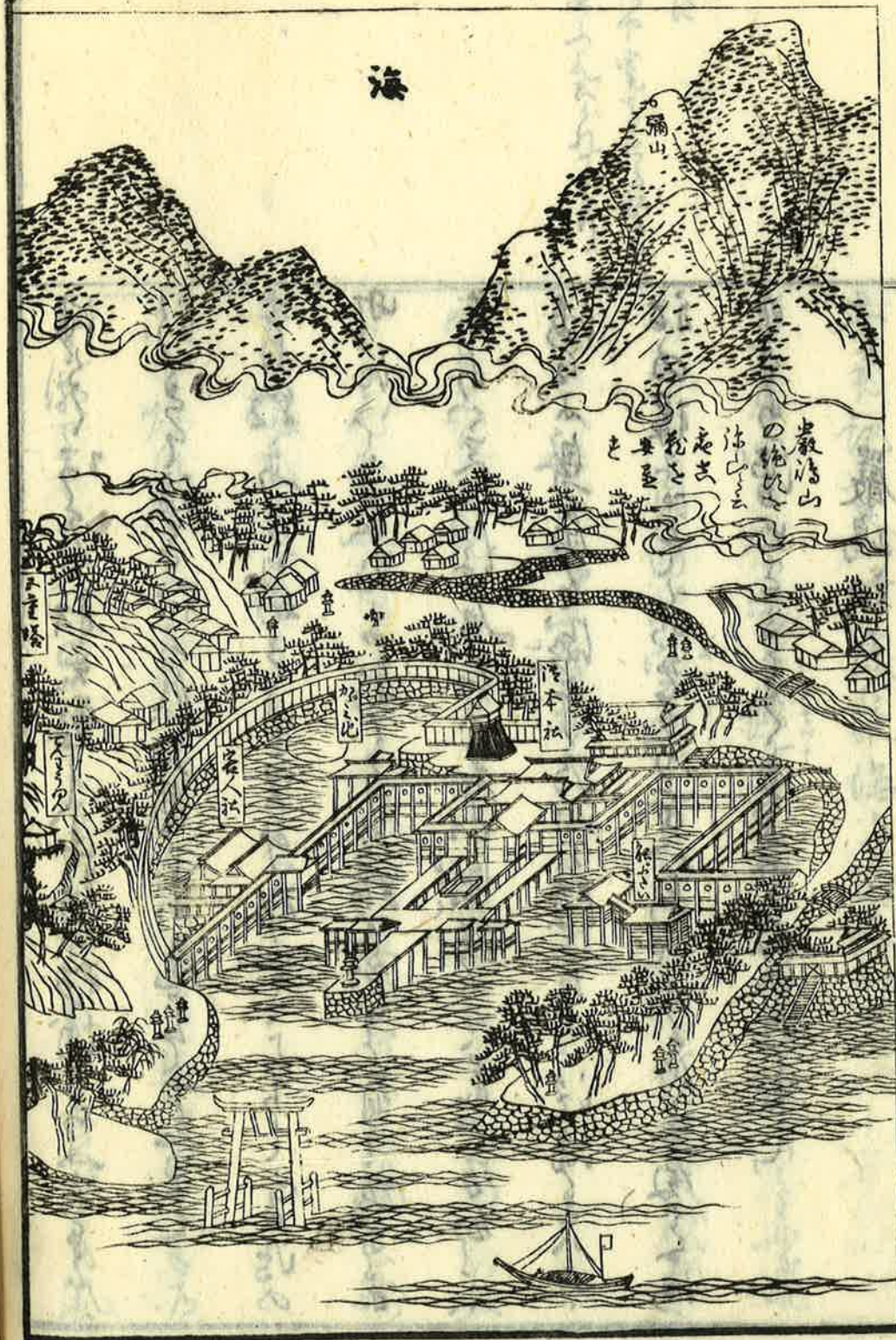
はるかにあつてはるかに海と陸とを
行きてはるかにあつてはるかに海と陸とを
七日船あつてはるかにあつてはるかに海と陸とを
町にふれなりとてあつてはるかに海と陸とを
あり、又のほろなりとてあつてはるかに海と陸とを
海と陸とをあつてはるかにあつてはるかに海と陸とを
はるかにあつてはるかにあつてはるかに海と陸とを
中より海とをあつてはるかにあつてはるかに海と陸とを

嚴嶋祠

島山秀色鬱崔嵬先見海門華表開十二

嚴嶋圖

樓臺浮水面忽疑安瀾城中來



色々大橋ありて道々、さうさ又海を北に八咫書あり
 嚴嶋山大神と云平相國乃ち、表に額を仰ぐ
 貴嶋大明神とある書なり、小燈道風ありといふも
 伊弉諾大神ありて、いふも、いふも、いふも、いふも
 多く推古天皇のとき、此の地より、元八市海島と
 いふも、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも
 神の湯ありて、人もれし、今、八市海島と云

大崎行役日記

すなはち
ふたつにわかれぬ

食を求むる女子もいかに窮乏なりけり我
店として角に居るなり町家の能く回る所
皆角なり港乃外浦より明神有なる所と云
七里中より積積ハナナありて遠く女
の浦なりと七里浦よりいふ所なり
今日れ善方に移る所なり
いふ人の道門にありて手おくれ
字なり一歩にありて一歩にありて
善所なりと云ふ所なり
りての山なりと云ふ所なり

すなはち
ふたつにわかれぬ

九日忠の海より所れなり
津内乃留船なり
十日あつた道にありて
乃船の浦なり
はなれり

にのふちへついで書置しつゝふしれつゝあち
まといつと得るのしう幸れおめめめめめめめ
て尋めれし幸ふしつゝ二里程ふへへめめめめ
もめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
まめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
めめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
仏波ふりふす丁めめめめめめめめめめめめめ
つゝめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
羊腸九折れめめめめめめめめめめめめめめめ
ふすめめめめめめめめめめめめめめめめめめ

観音殿南向ふしめめめめめめめめめめめめめ
改め造る経堂めめめめめめめめめめめめめめめ
改め造る経堂めめめめめめめめめめめめめめめ
案内めめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
めめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
あり、勅額ありめめめめめめめめめめめめめめめ
めめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
なし、諸堂皆後醍醐帝めめめめめめめめめめめめ
めめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
候、林原候れ靈堂有、武丁斗上に等心は室のま

是と奥北院とふいふ寺願二万五千石三斗此
 寺後有比叡山^{ヒエ}ふ伯仲なりしふ次方に兼^ヒ此中
 聖太因寺^ヒを城とす今ハ只八百石石諸寺
 寺^ヒ並し坊舎^ヒを^ヒもれ^ヒも山陽通^ヒ第一の御座
 かり山^ヒ上^ヒより五斗此寺を^ヒ守^ヒ月^ヒを^ヒ守^ヒふ^ヒふ^ヒ
 坂^ヒより^ヒと^ヒ並^ヒ與^ヒを^ヒ守^ヒふ^ヒは^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒ
 寺^ヒを^ヒ守^ヒく^ヒ城^ヒを^ヒ守^ヒれ^ヒハ人^ヒを^ヒ入^ヒて^ヒ漸^ヒと^ヒ飲^ヒと
 遠^ヒ大^ヒ小^ヒ保^ヒり^ヒも^ヒ山^ヒ、書^ヒ寫^ヒと^ヒ守^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒ
 入^ヒは^ヒ比^ヒを^ヒ曉^ヒなり^ヒふ^ヒ守^ヒ方^ヒ一^ヒふ^ヒれ^ヒも^ヒ守^ヒふ^ヒふ^ヒ
 山^ヒより^ヒハ^ヒ流^ヒ田^ヒ氏^ヒの^ヒ場^ヒと^ヒふ^ヒ、後^ヒに^ヒ凡^ヒ無^ヒふ^ヒふ^ヒ

七日^ヒ過^ヒり^ヒ人^ヒ々^ヒ大^ヒに^ヒ退^ヒを^ヒ必^ヒ以^ヒ、此^ヒふ^ヒ是^ヒより^ヒ大^ヒ坂
 まで^ヒふ^ヒ十里^ヒの^ヒ海^ヒ上^ヒ端^ヒ原^ヒ能^ヒと^ヒ思^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒ
 凡^ヒも^ヒ妙^ヒの^ヒ群^ヒれ^ヒハ^ヒ明^ヒ白^ヒより^ヒ清^ヒり^ヒの^ヒ議^ヒを^ヒ定^ヒふ^ヒ
 十八日^ヒ、此^ヒと^ヒふ^ヒ二^ヒ里^ヒ山^ヒ系^ヒより^ヒ馬^ヒを^ヒは^ヒき^ヒ坂^ヒ路^ヒに^ヒ
 あり^ヒる^ヒ人^ヒ々^ヒす^ヒけ^ヒと^ヒ此^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒ
 二^ヒ里^ヒより^ヒなり^ヒて^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒふ^ヒ
 一^ヒ里^ヒ松^ヒの^ヒ山^ヒ系^ヒ乃^ヒる^ヒ名^ヒを^ヒ、菅^ヒ公^ヒの^ヒ後^ヒより^ヒ極^ヒに^ヒふ^ヒふ^ヒ

題曾根偃松

聞道菅公遺愛、松盤根偃蓋鬱重々、高風
 何借大夫爵、長帶祥雲似臥龍。

偃松圖

今計太周一丈
 八尺梢二丈三
 尺枝自坤至
 艮二十間餘
 自乾至巽十間
 餘其間鬱茂
 如偃蓋每枝以
 木支之百五十本天正以前
 枝葉甚盛天心中祠宮



罹兵火此時西南枝燒枯云

と、因るに徑を經て松山を過るに、いづれに
 ありて山の岬よりわかれ、之を松山といふ。中へ橋
 うけ、その下は池なり。石殿あり、殿を自經に
 石を田間、四方に祠の位を置く。形は刻々四方
 切、計一トハ離れ、はるかに小祠一なる事なる
 久、其よりすてゐる根あり、祠の左右のうゑに
 大石、子大石、計二、其位を神とて、身附あり、
 けとく、いハ、石、菊、歌、や、う、子、お、く、実ハ大已貴、少

言ふ
大いなりしとてまた名を
とてしるすなりとて
いふなりとて



こころ
長崎の金蔵とてしるすなりとて四五丁ありて名を傷ふ
乃石とて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
日すに暮るなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
れも名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
と名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
なりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
強しとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
いふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
なりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて

大いなりしとてまた名を
とてしるすなりとて
いふなりとて

今松相連生如古松固但無
連枝二幹細小耳

元禄年中國主本多政武公
命使種之近代權大納言

藤基實
おとしなりしとてまた名を
とてしるすなりとて
いふなりとて

按一男松女松とて云ふハ和俗
ノ附會ナリトモ唐ノ唐ニ里
安赤松トアリトモ昨旗ノ旗ハ
ナシ

序極ノ男松女松とて云ふハ和俗
ノ附會ナリトモ唐ノ唐ニ里
安赤松トアリトモ昨旗ノ旗ハ
ナシ

序極ノ男松女松とて云ふハ和俗
ノ附會ナリトモ唐ノ唐ニ里
安赤松トアリトモ昨旗ノ旗ハ
ナシ
は家造なりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
て舟なりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
人業内一留なりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
明神の宗業なりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
上明神は名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
月なりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
祇園なりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
是なりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて
住持なりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて名をいふなりとて

傳説曰神后三韓凱陣ノ
時龍神献之云三韓ヨリノ
献上ナルヘシ



いへと海中に漂を理もあらは流改れい誤た
銅のを素くくお銅のいり、衡と銃と細密に
文あり証^{ナカハラ}にこれ像を海自とやうき
みむす、いへとくお玉の物とく、きりとおと
の松れを翻とく行^{カメ}極の海を松と、松とく
活とくきりくおとくか古川はいり色は松と
十九日、明日在城下く、きりく、町のきりく
石の像をきりくおとく入く、きりく、同く
像、きりく、きりく、きりく、きりく、きりく、
きりく、きりく、きりく、きりく、きりく、きりく、

古き

旅人のいり、きりく、きりく、きりく、
きりく、きりく、きりく、きりく、
きりく、きりく、きりく、きりく、

松山、きりく、きりく、きりく、
きりく、きりく、きりく、きりく、
きりく、きりく、きりく、きりく、

このきりく、きりく、きりく、きりく、
城下、きりく、きりく、きりく、
源忠國、きりく、きりく、きりく、
面、きりく、きりく、きりく、

樹陰横梨文一曲寄花情、縦使骨猶朽、長
傳、風雅、名、

忠度墓圖



人の許せ

いふはさるのねれあひの
よりいふはさるのねれあひの
れ

いふはさるのねれあひの
よりいふはさるのねれあひの
れ

法政園

福田氏云々
大坂の軍糧多岐の事
いふはさるのねれあひの

あふり二つ所北乃さふの丘小人磨の所の祠あり
祠あり照鏡といふ祠あり小祠あり、園を造り
て碑文を刻き置かれ、祠あり、祠あり、祠あり、祠あり
いふはさるのねれあひの
よりいふはさるのねれあひの
れ

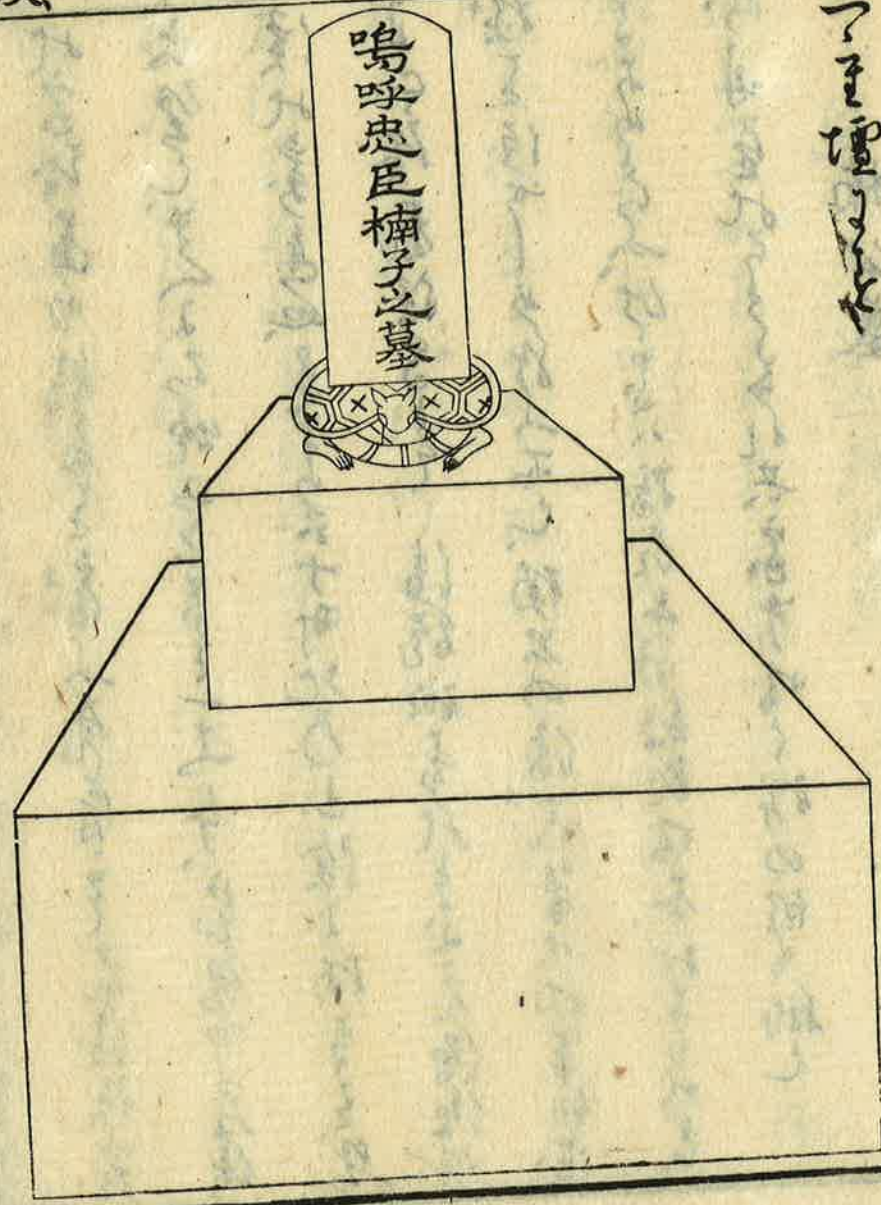
海方に仲哀帝の陵あり、石塔あり、石塔あり、石塔あり
とて、松樹の界あり、石塔あり、石塔あり、石塔あり
いふはさるのねれあひの
よりいふはさるのねれあひの
れ

石塔をいふは、建しとて、その塔のたてし
とげをなれ事、己より後、能くして、事、能くして
日、いふ、事、能くして、人、能くして、事、能くして
乃、来、建、事、能くして、人、能くして、事、能くして
小、姓、能くして、事、能くして、人、能くして、事、能くして
少、日、来、建、事、能くして、人、能くして、事、能くして
水、能くして、事、能くして、人、能くして、事、能くして
高、し、事、能くして、人、能くして、事、能くして
我、能くして、事、能くして、人、能くして、事、能くして
碑、ハ、大、事、能くして、人、能くして、事、能くして

高れを君義と乃、事、能くして、人、能くして、事、能くして
二、事、能くして、人、能くして、事、能くして

碑石、堅く、九寸、横、二、人、六
寸、厚、一、人、六、寸、中、堅、二
尺、八、寸、横、八、尺、下、堅、五、尺
横、一、丈、共、白石、也、碑、面
鳴呼忠臣楠子之墓
八字、八、分、厚、而、
源義公之親弟也、擬孔子
顔延陵季子墓云

碑文曰
忠孝著于天下日月麗乎天
天地無日月則晦蒙否塞人心
廢忠孝則乱賊相尋乾坤反
覆余聞楠公諱正成者忠勇



陽里にれはひくともえさす、古歌に傳へけり
あふれとともふ

題布引飛泉

千尋布帛色長瀑碧山隈、織女機中物應

從銀藻來

右の方此海邊に古村といふ所に求海をてます
卒はるもはる山ひる、古歌よりあや女隊に二男子
乃塚とびささふあれへし、あや女の名小山田を
うすふるとは、^{カン} ^{ガイ} 盛秋少かたに、たふは六甲山を
ふ留さうり又あふるふ、也、清歌の事、あや女隊、

万葉集

田邊福太郎

いひしうなるひと女のおき
まゝとん

大和歌

荒名員康女

すゝねぬまふあけせん
のそにけつたのりハ、あ
うりり

古歌

おたけし又うりえんは
のあは正統のまふは、あ
うりり

又

うりりへふれあふのあ
うりりへふれあふのあ
うりりへふれあふのあ

又

うりりへふれあふのあ
うりりへふれあふのあ
うりりへふれあふのあ

又

うりりへふれあふのあ
うりりへふれあふのあ
うりりへふれあふのあ

又

うりりへふれあふのあ
うりりへふれあふのあ
うりりへふれあふのあ

是れ里、武庫山、ふる、和歌の名、處なり、あふる

あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる

あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる

あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる

あふる

あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる

あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる

あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる

あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる

あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる、あふる

あり

「これぞとていふことゝも
わづらひしやうのやうな
ことゝもあら

世女めし

「これぞとていふことゝも
わづらひしやうのやうな
ことゝもあら

世女めし

「これぞとていふことゝも
わづらひしやうのやうな
ことゝもあら

世女めし

あり

「これぞとていふことゝも
わづらひしやうのやうな
ことゝもあら

世女めし

あり

「これぞとていふことゝも
わづらひしやうのやうな
ことゝもあら

「これぞとていふことゝも
わづらひしやうのやうな
ことゝもあら

「これぞとていふことゝも
わづらひしやうのやうな
ことゝもあら

世女めし

臺坐を脱ぎしと城藩よりとちりけふハ城の偏狹

「あゝとていふことゝもわづらひしやうのやうな

と堀れけしはるる居候ふはて流るるに西行の

宿のし江にれ里もさ清江にたもて牧方をな

「これぞとていふことゝもわづらひしやうのやうな

秋眠に其角のうさ思ひしやうの鶴鳴のけはえ

ふけく橋のささやかぬとて行府のまゝ又飯を

炊く「これぞとていふことゝもわづらひしやうのやうな

「これぞとていふことゝもわづらひしやうのやうな

何と面照り細江とて石の表あらむはるのえ度

「これぞとていふことゝもわづらひしやうのやうな

「これぞとていふことゝもわづらひしやうのやうな

「これぞとていふことゝもわづらひしやうのやうな

「これぞとていふことゝもわづらひしやうのやうな

「これぞとていふことゝもわづらひしやうのやうな

「これぞとていふことゝもわづらひしやうのやうな

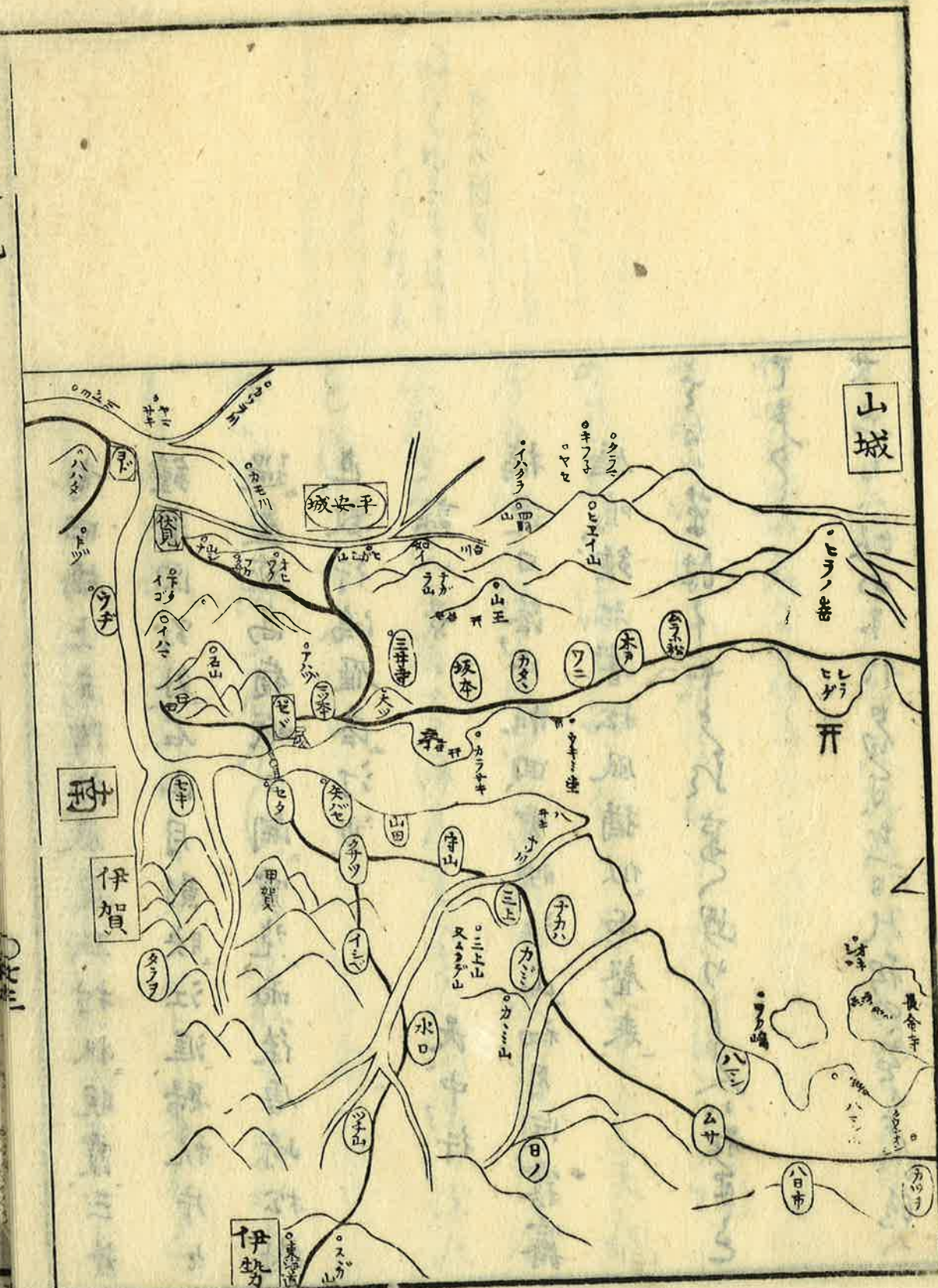
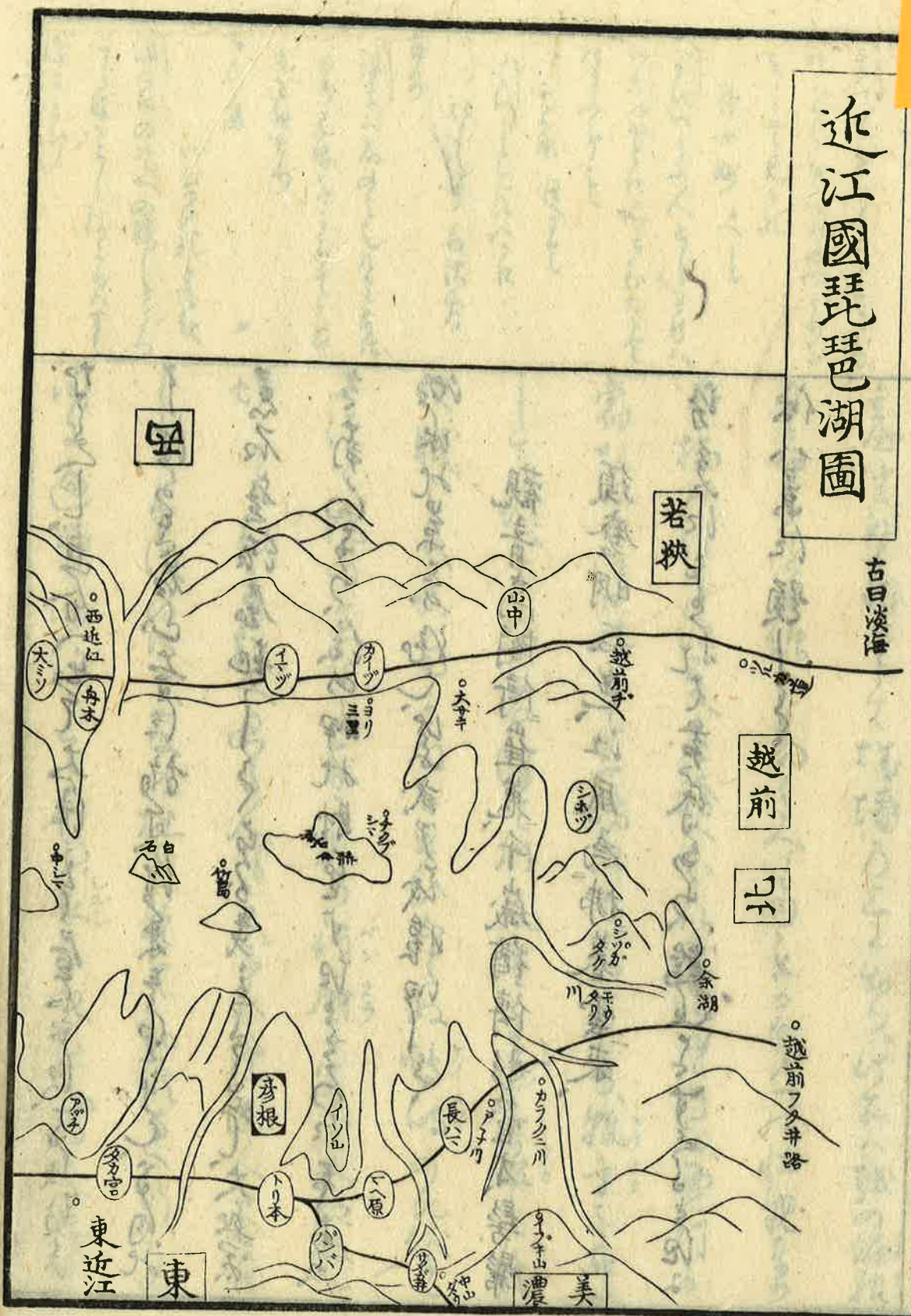
「これぞとていふことゝもわづらひしやうのやうな

「これぞとていふことゝもわづらひしやうのやうな

「これぞとていふことゝもわづらひしやうのやうな

彼八景に題し

近江琵琶湖圖



勢田橋上夕陽斜、風度孤村收晚霞、三井
鐘聲聞野外、石山月影映江涯、歸帆片片
過蘆荻、萬嶺峨々開雪苑、雨後唐崎松樹、
色數行、鴻雁落汀沙、

詠八景

長中行

橋邊日落、片帆回、雪映江山、初月開、霧霧
雁鳴、鐘二響、松風猶似雨聲來、

そらへ草はくやうに東へ西へ一人の影を
てまふ

其の日の坂の下に草を、一日の影を、

まけつて、海へ、そそり、海へ、そそり、海へ、

やうに、東へ、西へ、

女は、日、海へ、そそり、海へ、

つと、東へ、西へ、

乃、宮、人、海へ、そそり、海へ、

に、有、あ、れ、有、あ、れ、有、あ、れ、

毛、海へ、そそり、海へ、

女、日、海へ、そそり、海へ、

毛、海へ、そそり、海へ、

い、海へ、そそり、海へ、

他人の影を、
他人の影を、
他人の影を、

茶など流く時より少し遅く
廿七日 浪走りやう
廿八日 新坂

廿九日 九子石川の邊に茶屋を道と別れし
石表あり、連なり源宗長乃高橋たけし、いかに
目と高し、彼を流をきかぬと怪しむり、
うわーと罵り、石の方に山村八郎家なり、あ
るに大粒の土は、時より、流を流すは、
しき所なり、茶屋をくぐるや、より、
はたかた、
設もなし、宗長の、

宗長は砂浜に踏田人、初仕
今川義忠、字孫兵衛、太田義隆
出資、一休、砂浜、水、
上、
初、
宗長

是より、
長の墓となりぬれ、
石塊なり、
位、
金、
て、

昨日 強盗あり、
所乃中、
三里は、
よはらなる、

前乃父老より事内をいしき事には海流より
 傳キウテ音よりして曲門よりわける海流よりして
 事カありき事あり、九折の坂、石燈いしとう石標いしひらより
 あり、石標の接ぬ、金馬ナニカカス、カヒ燈等より用ひ、坂より
 渡り、巴野あり、大つ内よりあり、鐵テツ把ホウ、
 長脚サスミタ鑽ヒヨリ、狼牙ヒヨリ棒、多きこと、五折より、幕より、後より、院
 たり、ね、士卒より、人衆、然る、その連、事、に、さ、を
 傳キウテ音よりして、聲折セイセツして、とく、と、又、丁の、あ、れ、ハ、坊
 令、り、也、華表トウ、樓門ルウモン、又、重、塔、う、の、め、諸、事、と、い、ま
 も、あり、佛、在、祠、より、い、れ、ん、後、僧、事、あり、て、内、より

佛、廟、の、北、續ビヤクより、い、れ、ん、た、る、ま、い、て、は、後、乃
 あり、此、處、を、い、れ、ん、境、内、より、い、れ、ん、事、あり、
 金、る、の、節、目、結、接、事、を、事、な、し、と、い、は、し、一、つ、
 事、あり、側、より、右、地、事、と、は、家、事、を、い、れ、ん、事、あり、
 こと、事、あり、と、い、ふ、
 あり、清、水、浦、より、い、れ、ん、事、あり、
 事、と、い、は、れ、と、保、乃、い、れ、ん、清、見、寺、山、巨、鼈、背、上、色、可
 事、あり、事、あり、と、い、ふ、
 自、三、保、望、富士山、
 清、見、寺、山、巨、鼈、背、上、色、可
 三四、及、此
 白玉、撐、天、聳、青、岳、傍、海、開、巨、鼈、背、上、色、可

信是蓬萊

ふのきあはれ人の宅は極多し蓬萊のふり
 升る處にまゆとまはれくそは徳樹のふ
 実人様はにやゆゆとある人のそく大
 風まればなりになるそそふの南原ま
 ナ二月朔日と時ふふ山田ふふの程々谷
 小石の野うつくふふふふふにふふ海
 ともふふふふふふふふふふふふふ
 れて候ふふふ中れにの監曹ふふふふ
 流るるふふふふふふふふふふふふ

曆二冊とあるふふふふふふふふふ
 ナ四日ふふふふふふふふふふふふ
 家ふふふふ

萬里行程西海隈風霜無恙故園回江山
 踏盡為何事不是張騫博望才

明和四年丁亥冬十一月 常州水戸長玄珠記

全重録國圖
 五日本興國圖

五日本興國圖
 五日本興國圖

赤水先生著述出版書名

改正日本輿地路程全圖

唐士歷代沿革圖

全重鐫縮圖

小本管入

大清廣輿圖

地球萬國圖說

禮記王制地理圖說

和蘭新譯地球全圖

五常圖說

清槎唱和集

唐詩平仄考

是紀行中清客贈答詩文

標註 東輿紀行

漢文

附 真羽名山 北越七奇 諸州古碑攷

天象管窺抄

文金堂製本目錄

大恩齋稿

河内屋太助

小學

序 解

世間小教本 今校訂して意統のより

唐音和解

唐音の習得 唐音の習得 唐音の習得

白石先生鬼神論

白石先生 白石先生 白石先生

爲學初問

周南先生著 爲學初問 爲學初問

漢歷代の典廢諸儒の得失とく

天學指要

西村達理著 天學指要 天學指要

孝經經典餘師

孝經經典餘師 孝經經典餘師

子華子

全二冊 書經講義

畫圖西遊譚

畫圖西遊譚 畫圖西遊譚

改正難波丸

改正難波丸 改正難波丸

大坂宮寺巡

大坂宮寺巡 大坂宮寺巡

大坂名所獨案内

大坂名所獨案内 大坂名所獨案内

新撰伊勢細見記

新撰伊勢細見記 新撰伊勢細見記

兩面年代記

兩面年代記 兩面年代記

大成年代廣記

大成年代廣記 大成年代廣記

燕石樓志

燕石樓志 燕石樓志

孝經大義國字解 三冊 洪範全書 六冊

文化五經 道春点 李士卿 全四書字引 一冊

洪範和解 謝敷入 全四書字引 一冊

金華文集 平子先生 集 徂來集 二十冊

古今詠物詩選 朱竹仙先生 全四冊

附錄歷朝名家詩話 漁洋山人著 一卷

初學作文圖牋 折本 初學作文圖牋 袖珍本

李喬詠物詩選 一冊 唐的李喬詠物詩

唐明詩類函 二冊 名家詩二千二百余首

同二集 歷代名家詩 二冊 初學作文圖牋

日本名勝詩選 一冊 諸名家名勝詩選

本朝詠物詩選 一冊 詠物詩選

七書正文 二冊 漢書七書正文

同頭書 五冊 同侶諺抄 十冊

孫子經典餘師 謝敷入 吳子國字解 三冊

武用辨略 八冊 武門入用の事

校正 武用辨略 五冊 武田信玄の武略

本朝武具要說 一冊 武田信玄の武具

古今軍器製作辨 二冊 昔の武具の造り

楠十卷書 五冊 楠十卷書

月水奇縁 馬季著 五冊

新累解脫物語 同著 五冊

松深情史秋七種 同著 五冊

昔語質屋庫 同著 五冊

金花夕映 谷義著 五冊

石言遺響 馬季作 五冊

月宵鄙物語 五冊

小栗外傳 北齊画 五冊

拳會角力圖會 二冊

滑稽即興新 山東傳聞 五冊

築山庭遺傳 三冊 同庭作傳 一冊

聞書秘傳抄 一冊

農家益 三冊

同後篇 二冊

珍國華万葉集

蠟の製方

蠟の製方

蠟の製方

蠟の製方

蠟の製方

蠟の製方

都名所圖會 六冊 同拾遺 五冊

大和名所圖會 七冊 河内名所圖會 六冊

和泉名所圖會 四冊 攝津名所圖會 十二冊

以上 平安秋里大著 五畿内名所圖會 箱入全部三十冊

東海道名所圖會 六冊 水曾路名所圖會 七冊

伊勢奈宮名所圖會 六冊 播磨名所圖會 五冊

紀伊國名所圖會 五冊 同二篇 五冊

住吉名勝圖會 五冊 古輩順拜圖會 十冊

唐土名勝圖會 六冊 大津都の有り山人物寺今乃 唐土目前に見る事多く要記

都花月名所 懷中本 月花虫紅紫其外はあふ 唐土目前に見る事多く要記

芝居両面鏡 大徳寺蔵 芝居の裏面を映す鏡 芝居の裏面を映す鏡

戲場訓蒙圖景 五冊 芝居の芝居の芝居の芝居

歌舞妓叢書 十三冊 芝居の芝居の芝居の芝居

俳優奇跡考 八冊 古今俳優名人の一代記 芝居の芝居の芝居の芝居

役者百人化粧鏡 一冊 百人の化粧の鏡 芝居の芝居の芝居の芝居

同艸比種 一冊 芝居の芝居の芝居の芝居

俳優演じ真砂 六冊 金門五三柳の影 芝居の芝居の芝居の芝居

川崎音頭 伊勢十人代 五冊 五大方 五人代 四冊

三勝櫛 三勝半七 六冊 言葉艸 平井権八 五冊

秋葉話 芝居九府門 六冊 戲場枝折 宿無圖七 三冊

文化歳在乙丑孟春

東武 小倉仁兵衛

京都 林 伊兵衛

藤井 孫兵衛

攝城 本太助

田邑 九兵衛

浅野 弥兵衛

製本書肆